

# 古文と漢文の往還により資質・能力の定着を図るアイデア

## 実践場面

高等学校 1～2 学年 言語文化・古典探究

「古典の作品や文章について考えを広げたり深めたりする場面」

## ねらい

古文と漢文で学習した内容を相互に往還させることにより、考えを広げたり深めたりすることを目指す。

## 【アイデアのポイント】

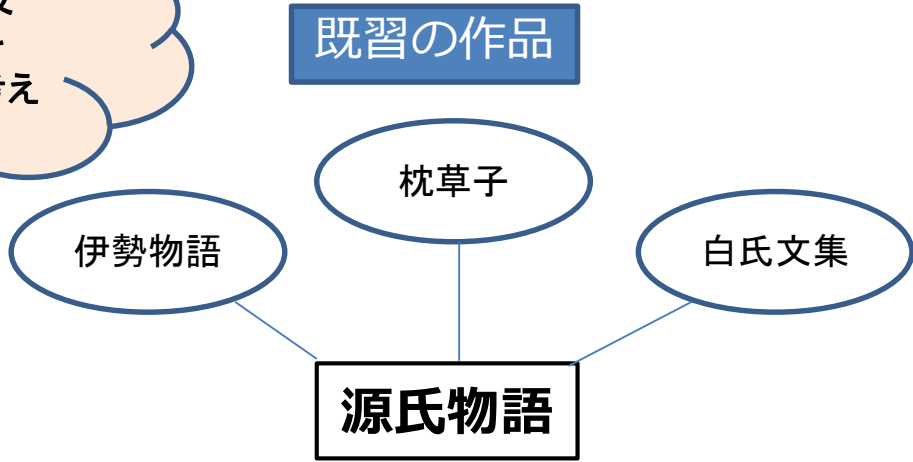
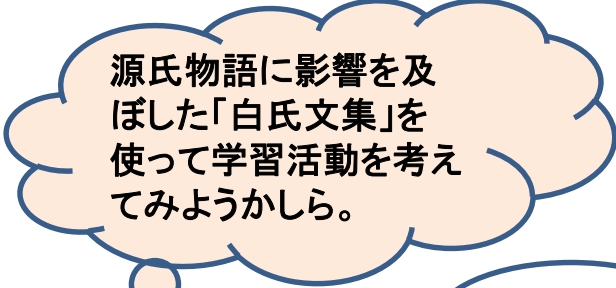
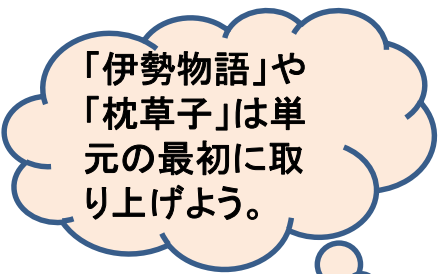
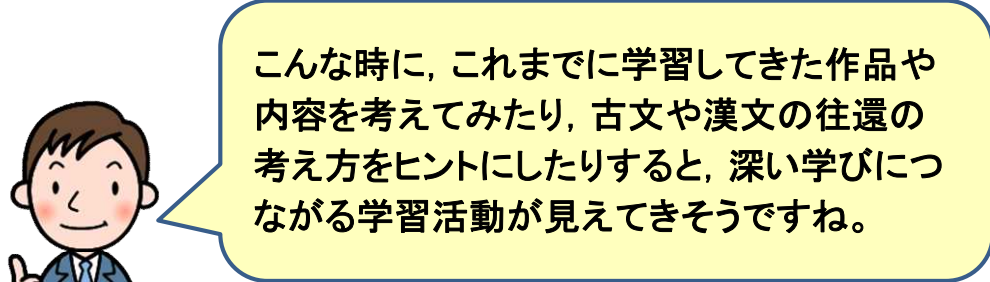
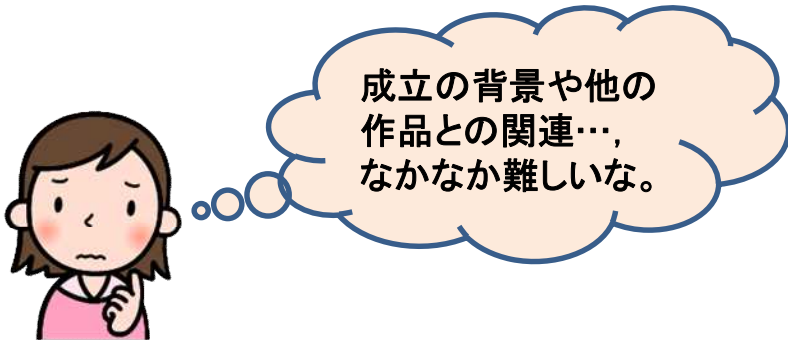
古文と漢文は、関連性が非常に強い領域ですが、それぞれ独立して学習が進められていることが多いようです。相互の結び付きを意識し、活用・発揮を積極的に取り入れることで、一つの作品からだけでは得られない新たな気づきを獲得し、深い学びへとつなげます。



# 往還では、既習の学習内容も活用しよう

【例 源氏物語の授業構想】

指導目標 作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを  
読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察する。  
(「読むこと」工)





「源氏物語」と「白氏文集」を関連させて、次のような学習活動を考えてみました。

- 玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋の話を踏まえて、桐壺帝と桐壺更衣におとずれる運命を本文から推察してみよう。
- 「源氏物語」の中のどの部分が、「白氏文集」のどの表現を踏まえたものか、考えてみよう。
- 「源氏物語」の冒頭の表現効果を、「白氏文集」の内容と関連付けて考えてみよう。
- 「白氏文集」を踏まえた表現は、「源氏物語」以外にもあるのか探そう。



「源氏物語」(古文)→「白氏文集」(漢文)の逆のパターンでも考えられそうですね。

① いづれの御時にか、女御・更衣あまたさながらひ給ひける中に、いとやむことなき際にはあらぬが、すなれて時めき給ふありけり。  
〔源氏物語〕冒頭

② 唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれど、やうやう、天の下にも、あぢきなう、人のもて悩みなになりて、楊貴妃のためしも引きいでつくくなりゆく…  
〔源氏物語〕桐壺

③ たゞねゆくまほろしもがな伝にても魂のありかをそこと知るべく  
〔源氏物語〕桐壺

④ 楊貴妃の、帝の御使ひにあひて泣きける顔に似せて、「梨花一枝、春、雨を帯びたり。」などいひたるは…  
〔枕草子〕木の花は

⑤ 生きての世死にての後の後の世も羽を交はせる鳥となりなむ  
〔天鏡〕村上天皇が宣耀殿の女御に贈った和歌

⑥ 秋になる言の葉だにも交はらずは我も交はせる枝となりなむ  
〔⑤に対する女御の返歌〕

⑦ 世の中に、長恨歌といふゆみみ物語に書きてあるところあるなりと聞くに、いみじくゆかしけれど、え言ひよちぬに、さるべきたよりを尋ねて、七月七日言ひやる。  
〔軍記日記〕

⑧ わたしが探しました「長恨歌を踏まえた古典」

【課題②】次の古典文学作品は、『長恨歌』を踏まえたものとされている。それぞれどの部分を踏まえたものか、行番号を示し、長恨歌を踏まえたことによる効果を書きなさい。

【長恨歌と文学作品の関連性に着目して学習したワークシート例】



## 【研修講座の感想から】

- ・活用・発揮の考え方を応用すれば、**定着が早く、深い理解につながると**思いました。
- ・**学習したことが活かされる場面を設定することが大事だ**と思いましたが。学んだことを使う場面がはっきりしない国語においては、活用・発揮をより意識的に取り入れていくことも必要だと思いました。

R2初任者研修講座（高等学校）受講者

といった感想に加え

- ・**現代文での学びを古典へ、古典での学びを現代文へと往還して**いくこともできるのではないかと感じた。そのようなことができるように、見通しをもった計画や効果的な学習活動を考えていきたい。

R2初任者研修講座（高等学校）受講者

という、発展的な考えを示してくださる先生もいらっしゃいました。



ここでは、「往還」の考え方を踏まえ、「漢文」→「現代文」の往還による「書くこと」の授業を構想して下さったT先生の実践例をご紹介します。

1 単元名 漢詩から文章の技を学ぼう～「転」の働きに注目して～

2 単元の目標

【知識及び技能】  
 ・語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、文章の内容を把握することができる。

【思考力・表現力・判断力等】 A(1)イ  
 ・自分の思いや体験が効果的に伝わるよう、文章の種類や構成を確かめ、表現の仕方を工夫することができる。

漢文から文章構成の技法を学び、書くことにつなげるという活用・発揮の視点。

3 単元と生徒

国語の課題として、文章作成に時間がかかること、そして自分の体験や思いを伝えるための表現の方法が乏しいことがあり、本単元の学習を将来に繋がるような作文のスキル向上に関連させたいと考えている。

前単元の「絶句」では、唐詩の時代背景や、「起」「承」「転」「結」構成など、漢詩の基本的な構成や知識を学習済みであり、本単元ではそれらを活用して、漢文の学習を社会や自分との関わりの中で生かせるような展開を理想としている。

4 単元の指導計画と評価計画（全6時間、本時4／6）

4	「転」の働きを使って日常の文章を作成することができる。	普段の文章構成に「転」の働きを加え、2つのテーマについて文章を作成する。
5	自分の思いや体験が効果的に伝わるよう、「転」の表現を活用して作文を書くことができる。	「転」の表現を活用して2つのテーマについて400字以上の作文を書く。

スモールステップで「転」を意識した短い文章を書き、ゴールである400字の文章を書く学習活動につなげているところがポイント。



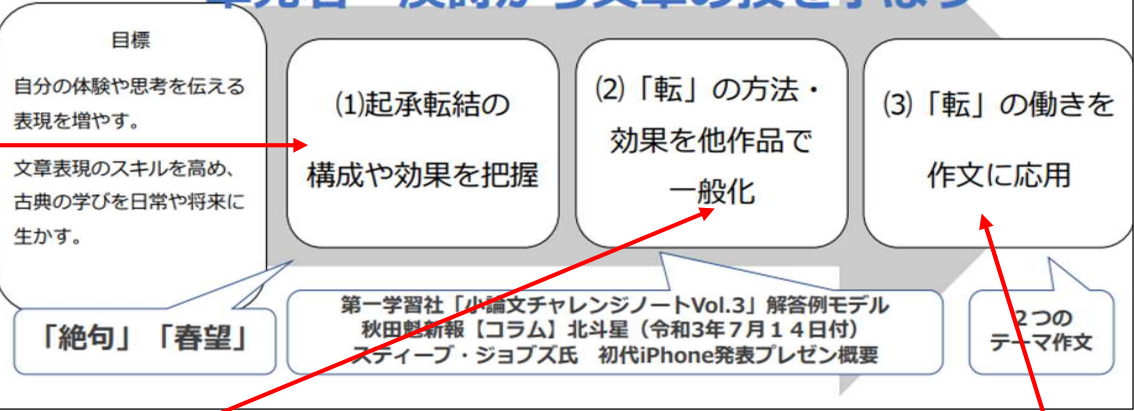
【授業の実際】

# 4. 生徒の実態と授業実践

手立て②授業実践

国語総合 第1学年 総合学科2～4組

## 単元名 漢詩から文章の技を学ぼう



既習の振り返りと関連付け

「転」の働きを日常の文章に使ってみよう  
目標：「転」の方法・効果を他作品で一般化

小論文で活用できる予弁法の紹介

どんな「転」の工夫をしている？

漢詩以外の文で「転」の使い方を確認

- 新聞コラム
- 小論文解答例
- プレゼン

14

「「転」の働きを日常の文章に使ってみよう」ワークシート  
【Googleドキュメント書き込み式】生徒の記述

自分の作文に「転」を加える活動 (2テーマ作文)

視点の切り替えや相手への問いかけ等文章の新たな工夫がみられる

補足情報を調べて文章に加える生徒も増加

漢文と日常生活とを関連付けた一般化

「書くこと」への応用, ICTも活用して

## ～実践をしたT先生からの感想～

本単元は、漢詩の構成「起承転結」の効果について考察し、「転」の効果を実際の作文に活かすことを目標とした授業です。作品の「転」を理解した生徒が、それを応用して自分で文章を書く活動において、はじめから小論文のような長文に応用するのは無理があるように思われたので、「転」を使って短い文章を作成し、それらに意図した工夫を、自分の言葉で説明するというスモールステップを設けました。

生徒の日常生活になじみのうすい、古文・漢文の授業は、ともすると教師の解説中心の授業になる恐れがあると感じています。日常との関連が少ないからこそ、生徒自らが調べ、考える時間を増やし、学習と日常生活の関連付けを行うような活動を取り入れる工夫が必要だと感じました。



T先生のアイデアを参考にすると、古文と漢文との往還だけでなく、現代文と古典との往還や、「読むこと」と「書くこと」など領域を越えた往還もできそうですね。